

研究者として、教育者として —教員生活を振り返って—

金子 和 夫*

1. 運命的な恩師との出会い

私は、1971（昭和46）年4月、専修大学経済学部に入學したが、同大学への明確な志望動機があったわけではない。国鉄職員であった父親の仲間からの紹介で受験した結果と自分自身で受け止めている。

経済学部では2年次からゼミが履修できることから、私は経済政策のゼミを選択し合格した。しかし、経済理論になじむことができず、さらに、一般教養で「仕方なく」履修した数学の授業において、「経済学部では3年次に必修科目で統計学があり、数学より難しい」と言われたことから、今後の進路変更を真剣に考えるようになった。結果として、転学部試験を受験し、2年次から法学部に転部した。なぜ法学部かと言えば、当時ベトナム戦争や沖縄返還など、政治がダイナミックに動いていたこと、労働組合運動、特に官公労働者の「スト権奪還闘争」もそれに合わせて大きなうねりがみられ、労働問題や労働法を学びたい気持ちが強くあったことによる。この法学部への転部

が私の職業生活に大きな影響を与えることになる。

法学部では3年次からゼミを履修することになり、2年次末にゼミを受験した。もちろん「労働法」ゼミである。ところが、3年次になってもゼミが始まらず、自主ゼミという形で4年次との合同ゼミが進められた。私をはじめ複数のゼミ生はこの中途半端な状況の打開に向けて、法学部長と話し合いを持った結果、学部長からゼミ担当教員の退職と代わりの非常勤講師が決定したとの報告があった。これに対してゼミ生の意見は二つに分かれ、非常勤講師の来校時に受入れの賛否を問う信任投票が行われた。私を含めた3年次生を中心に投じた賛成票が上回り、私ともう一人のゼミ生が非常勤講師室に先生を迎えに行った。私が「先生、信任されましたのでどうぞお越してください」との挨拶に、先生は「そうですか、ありがとうございます」といったような言葉をいただいたと記憶している。これが、私の生涯の恩師で私が研究者の道に進むきっかけとなった「佐藤進先生」（当時：日本女子大学教授）との出会いであった。

2. 大学院進学

「ゼミとは、教員と学生との『喧嘩の場』だ」

* Kaneko, Kazuo
ルーテル学院大学

という先生の言葉が、その後のゼミ運営そのものを物語っていた。ゼミ発表やゼミ論作成において、相当の先行論文を読むことが要求された。さらに、先生は、「社会現象や社会構造との関係において法を客観的にみること」、特に労働法や社会保障法は「生ける法」でなければならないと機会あるごとに言われた。いわゆる「法社会学」的考察の重要性を常に指摘された。そのため、単に先行研究の結果をまとめたゼミ発表にとどまらず、法制定当時の時代背景と今日の社会状況、生活状況を前提とした法の適用状況などを念頭において、発表資料づくりを行うことが当然ようになった。ゼミでは、それをたたき台として賛否両論に分かれたディベートが毎行われ、そこには先生が口をはさむ余地がないほど議論が活発化し、その後の居酒屋における議論に発展する場合も多々あった。

こうしたゼミでの議論はその後の私の進路に大きな影響をもたらした。大学卒業年次において国家公務員試験を受験し内定先まで決まっていたが、佐藤先生のゼミの印象があまりにも強烈で、この先生の指導の下で研究生生活を継続したいとの欲求から大学院への進学を決定した。翌年度以降、専修大学大学院法学研究科に在籍して労働法を研究する一方、週1日は日本女子大学の大学院に出席し、院生と議論しながら先生の指導を受けて社会保障法の研究をあわせて行うことになった。

この時期に特筆すべきは、先生と一緒に「日本社会保障法学会」(当時：社会保障法研究会)創設に向けて活動し、さらに、創設3年目から10年間にわたって学会事務局を運営したことである。特に理事会において、当時の私からすればそれぞれの学問領域の大家である著名な先生方との出会いは強烈であった。有泉亨先生(東大名誉教授)や沼田稲次郎先生(東京都立大学名誉教授)を始めとした先生方の発言は、労働法や民法、そして社会保障法にとどまらず、政治・経済を含めて斬新かつきわめて興味深いものであった。理事会のたびに、理事の先生方から私のような若輩者に常

に温かい言葉をいただいたことは、今でも鮮明に覚えている。

大学院では、佐藤先生以外のもう一人の恩師である「石川吉右衛門先生」(当時：東京大学法学部教授)との出会いも指摘しなければならない。石川先生は、私が学部4年次の時非常勤講師として労働法を担当されていた。石川先生は当初から「怖い先生」というイメージが強かった。授業は東大法学部の教材を用いて展開されたが、石川先生はそれとともに小六法を必ず持参し、条文の説明とその解釈を徹底して私たちに提供してきた。その際授業に向き合っていない受講者がいたら、すぐに先生の「カミナリ」が落ちたことを思い出す。大学院入学後、どういう経緯から明確に覚えてはいないが、修士課程の授業と論文指導は石川先生が非常勤として担当されることになった。先生の授業は毎回判例研究で、その解釈について司法試験の口頭試問のようなやり取りが続いた。結果として、私は、佐藤先生の法社会学的研究と石川先生の法解釈学的研究を学ぶことができたと思っている。

そして、修士論文は、大学院入学後すぐに佐藤先生とともに参加した電労連(全国電力労働組合連合会、現在「全国電力関連産業労働組合総連合(電力総連)」)の特別委員会での研究(電労連1975)(金子1978)をもとに、石川先生の指導で書き上げた『公益事業と労働基本権－電気産業と労働基本権－』であったことを付記し、今は亡き二人の恩師に感謝する次第である。

3. 研究者として育てられた 東京都立労働研究所

修士課程修了後博士課程に進学し、その後法学部助手として採用されたが3年後に退職となった。

そこで、佐藤先生の紹介で、東京都立労働研究所研究員(非常勤)として研究者の道を継続することとなった。労働研究所以外にも複数の非常勤講師として従事することができたが、私を研究者

として育ててくれたのはこの研究所であったと考えている。

東京都立労働研究所は1978年4月に設立され、当初、労使関係、労働市場、中高年労働、労働衛生の4部門で、後に女性労働を含め5部門での研究体制がとられた。私が入ったときの所長は社会保障法学会理事会でお世話になった有泉亭先生で、87年からは松島静雄先生（東大名誉教授）である。他に助言者として、佐藤先生、氏原正二郎先生（東大名誉教授）、佐野洋子先生（慶応義塾大学教授）などが参加した毎月の会議で、議論しアドバイスを得ながら調査研究を進めていった。調査研究は初めてであり、すべてが新鮮だった。当時の統計調査や面接調査は、今日の調査方法からすれば「初歩的」であったかもしれないが、法学、経済学、社会学など異なる分野の専門家が3名でチームを組み、1～2年という時間をかけて議論の中で分析を行っていくという研究スタイルから、かなり質の高い研究成果をうみだすことができたと自負している。

研究所では、研究員の誰もが年間少なくとも10本以上の調査研究に関わっていたが、中でも、私が女性労働部門に在籍していた時の調査研究である「女子専門職の就労形態とその実態」は、その後の私のライフワークの一つとなるものであった（金子1990）。この調査は、都内の老人福祉施設のほぼ悉皆調査といえるもので、197施設の施設長ならびに職員2,476人に対して実施した。調査結果から、老人福祉施設におけるマンパワーの賃金や労働時間など労働条件の課題とともに、適職意識や能力開発などの課題とあわせて、量的かつ質的な人材確保の必要性を指摘した。当時、こうした規模で詳細な調査研究はほとんどない状態だったため、この報告書が刊行されてから、専門誌（金子1991）、社会保障法学会（金子1992a）、社会福祉学会（金子1992b）での報告および学会誌への論文掲載の機会が与えられたことに今でも感謝している。特に、私は社会福祉学会員でなかったためこの発表前に入会申請したが、その際佐藤進先生と一番ヶ瀬康子先生（当時日本女子大

学教授）が推薦人となっていただいたことに感謝したものである。

都立労働研究所研究員の職を得た5年後、京都の花園大学が社会福祉学部を創設する際に助教授として赴任することとなった。京都に住まいを移すことも考え一度は家族用マンションを借りたが、労働研究所研究員として研究を継続したかったこと、また、首都圏での非常勤講師もかなりあったことから、毎週火曜日に京都へ、そして木曜日夜に埼玉へという単身赴任の形態を選択した。毎週の往復新幹線代、さらには、94年から学生に頼まれて創部した硬式野球部が京滋大学野球連盟1部リーグに昇格し、土日に公式戦が入ったことから、時期的に週2往復の新幹線代が自己負担となったときには、さすがに悩んだものである。特に京都まで来たのに雨で試合が流れた時など泣くに泣けない状態であった。しかし、この野球との出会いが、その後の少年野球、中学野球へと結びつき、今日に至るまで地域貢献および教育の一翼を担っていると自負している。

4. 本学における教育者としての役割

7年間の花園大学での勤務を終え、埼玉県にある東京国際大学に教授として移ることになった。同大学でも、花園大学同様、新学部（人間社会学部）を創設するに当たっての採用であった。最初の1年間は旧学部の最終学年のゼミを担当したが、これは本当に「痛快」なゼミであった。10数人の中には看護師やけん玉チャンピオンなど、ユニークかつ活動の活発さは、「3万円台での海外合宿」の実施など、私がゼミ生に振り回された感があるといってよかった。ゼミも熱心で複数は大学教員になっている。新学部の1期生ゼミも20人ほどいたが、これも「すごい」としか言いようがなかった。ゼミ運営を任せていたらいつまでも続いているし、オープンキャンパスでは、高校生に声をかけてゼミに参加してもらいながら、高校生が一言も話せないような状況さえ生まれていた。ゼミ合宿も勝手に「島根県隠岐の島」に決定し、最終日には複数が船に乗り遅れて私と一緒に

に飛行機で松江まで帰らざるを得なかったなど、大騒ぎが続いたゼミだった。翌年度も新規に70名ほどの希望者があったが、5名程度の入ゼミを認め、卒業後は大学教員や公務員などになっていった。ゼミは少人数でも大変だが、多人数でも大変な時代であった。

東京国際大学では、ゼミ生には恵まれたが、学部運営委員として、心理系中心の中で福祉の充実が思うようにいかなかったこと、特に大学院の福祉系専攻設置が途絶えていたことから、このまま同大学に留まるか否か考えるようになった。その時にルーテル学院大学に誘ってくれたのが市川一宏先生だった。すでに、花園大学在職中から本学で非常勤講師として「法学」を担当していたこともあり、本学の学生気質は前述の東京国際大学のゼミ生同様、私の心をくすぐっていた。また、「表の社会事業大学、裏のルーテル学院大学（当時は神学大学）」と、著名教員による福祉教育の充実度は、福祉関係において共通の理解となっていた。そこで、改組転換（社会福祉学科等3学科体制創設）における3回目の異動先として2000年度から本学で教鞭をとることになった。

本学では、市川先生が長く学長職を務めた時期で、その間私も市川体制を支える一人として学内行政に係ることが多かった。異動3年目の2002年度から2013年度まで社会福祉学科長、2014年度から2019年度まで人間福祉心理学科長、あわせて学科長を18年間引き受けてきた。前任の西原先生の社会福祉学科長10年間について、「こんな激務を10年間も」などと思っていた当時からすれば、教職員の理解と協力、また、学生との関わりの楽しさがなければ続けることが不可能だった18年間と考えている。さらに、2018年度、19年度の2年間は、学科長に加えて教務委員長、教養主任の役割を担うことになり、毎週のように会議の連続であった。そのためというわけではないが、なかなか本学で「研究者」として成長できなかったことを猛省している。

本学の非常勤時代はほぼ土曜日中心の出校日であった。土曜日の非常勤講師室は非常ににぎやか

で、全社協の和田敏明先生、東京天文台の西先生、法政大学教授の和田先生などそうそうたるメンバーであった。その理由としては、土曜日開講であったからこそ、非常勤での出校が容易であったのであろう。

非常勤時代のみならず専任になってからも、学生数は多く、特にユニークな学生が多く、先生方を含めてにぎやかな大学であった。一人で放っておいても必ず何かを見つけてくる学生が大半を占め、講義やゼミは自分の学生時代を彷彿させるような雰囲気があった。その時代に本学で教鞭をとれたことは「教育者」として非常に喜ばしいことであった。

本学での専任教員時代に特記しておきたいことが複数ある。その一つは「福祉系高校」の教育に関われたことである。福祉系高校は以前から存在していたが、ようやく教科「福祉」が認められ、「福祉の教員免許」を付与するための現職教員等講習が開始されることになった。前任校（東京国際大学）での最終年度から関わり、私の担当である社会福祉制度の講習内容と講習会テキストの作成に携わった。その後3年間にわたり、全国6か所の大学において各3週間で福祉の教員免許を付与する講習会の講師を、現職の福祉系高校の先生方と担ってきたことは、福祉教育を継続していくうえで私の大きな財産となった。あわせて、文部科学省での教科「福祉」の学習指導要領の改訂作業に関わったことも貴重な経験である。本事業に関連して社会福祉制度の指導方法を提供し（金子2022）、また、検定教科書（金子2005）を刊行したことも高校での福祉教育に寄与したものと自負している。

二つには、NHK ラジオへの出演とそのテキスト作成である。佐藤進先生の紹介により、2003年度から来年度まで（途中1年間を除く）、NHK ラジオ「社会福祉セミナー」に出演してきた。最近では、毎年度6月の土曜日4回（再放送は日曜日4回）25分番組で、「社会福祉の法律と制度」について話すとともに、NHK 出版からテキストを出版してきた。ディレクターが求める「わかり

やすく法制度を話す」、テキストも「わかりやすく法制度を説明する」ことに心がけ、20年以上担当することができた。教室における講義のように歌いながら、冗談を飛ばしながらというわけにはいかないが、法制度をわかりやすくという教育的効果を達成できたのではないかと考える（金子2022）。

三つ目に、私の専任としての教員生活の最後に、恩師であった佐藤進先生に代わって監修本を出版できたことである（金子2016）。本書は、公認心理師法が成立し、その国家試験に対応し得るものであるが、本学がキリスト教精神に基づく「福祉と心理」の教育を主眼とする大学に籍を置く者として、縁を感じずにはいられないのである。

いずれにしても、30数年にわたる教員生活において、多くの教職員の方々にお世話になったことに感謝したい。また、多数が苦手とする法制度をわかりやすく講義するために、歌や冗談に付き合ってくれた学生や大学院生にも感謝したい。そして、最後に、家族に感謝し、この紙面を閉じることとする。

【参考文献】

- 電労連（1975）：電労連スト規制法対策特別委員会・全国電力労働組合連合会『ストライキ規制法撤廃に関する対策報告書（中間）』（1975年8月）全83ページ
- 金子和夫（1978）：「公益事業における労使関係について」公益事業研究30巻2号（1978年12月）41-70
- 金子和夫（1990）：東京都立労働研究所『女子専門職の就労形態とその実態－老人福祉施設を中心として－』（下山昭夫・上林千恵子・金子和夫共著、1990年3月）49-81、119-122
- 金子和夫（1991）：「福祉マンパワーの『量』と人材確保－労働の視点より－」社会福祉研究50号（1991年5月）116-120
- 金子和夫（1992a）：「老人福祉施策における福祉マンパワー－老人福祉施設マンパワー調査の分析を中心として－」社会保障法7号（1992年5月）51-62
- 金子和夫（1992b）：「福祉マンパワーの現状と課題－保健医療・福祉マンパワー対策本部中間報告とマンパワーの確保－」社会福祉学33-1号（1992年6月）46-63
- 金子和夫（2002）：大橋謙策編『福祉科指導法入門』中央法規（2002年4月）119-126
- 金子和夫（2005）：大橋謙策編『社会福祉制度』中央法規（2005年1月）181-214
- 金子和夫（2022）：NHKテキスト『社会福祉セミナー2022年4－9月号』NHK出版（2022年4月）38-53
- 金子和夫（2016）：金子和夫監修、津川律子・元永拓郎編『心の専門家が出会う法律【新版】』誠信書房（2016年9月）全251ページ